

椎地四郎殿御書

弘安四年四月二八日 六〇歳

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候ひし処、仰せ候ひしが如く少しも<sup>違</sup>ちがはず候ひき。これにつけても、いよいよはげまして法華經の功德を得給ふべし。師曠<sup>しこう</sup>が耳・離婁<sup>りろう まなこ</sup>が眼のやうに聞き見させ給え。

末法には法華經の行者必ず出来すべし。但し大難来たりなば強盛の信心<sup>いよいよ</sup>弥々悦びをなすべし。火に薪<sup>たきぎ</sup>をくわへんにさかんなる事なかるべしや。大海へ衆流入る、されども大海は河の水を返す事ありや。法華大海の行者に諸河の水は大難の如く入れども、かえす事とがむる事なし。諸河の水入る事なくば大海あるべからず。大難なくば法華經の行者にはあらし。天台の云はく「衆流海に入り薪火<sup>たきぎ さか</sup>を熾んにす」等云云。法華經の法門を一文一句なりとも人にかたらんは過去の宿縁<sup>しゆくえん</sup>ふかしとおぼしめすべし。經に云はく「亦正法を聞かず是くの如き人は度し難し」云云。此の文の意<sup>こころ</sup>は正法とは法華經なり。此の經をきかざる人は度しがたしと云ふ文なり。法師品には「若是善男子善女人乃至<sup>ほつしほん</sup>則如来使<sup>そくによらいし</sup>」と説かせ給ひて、僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使ひと見えたり。賁<sup>きへん</sup>辺すでに俗なり、善男子の人なるべし。此の經を一文一句なりとも聽聞<sup>ちようもん</sup>して神<sup>たましい</sup>にそめん人は、生死の大海を渡るべき船なるべし。妙樂大師の云はく「一句も神に染めぬれば咸<sup>ことごと</sup>く彼岸を資く、思惟修習<sup>しゆいしゆじゆう</sup>永く舟航<sup>しゆうこう</sup>に用たり」云云。生死の大海を渡らんことは、妙法蓮華經の船にあらずんばかなふべからず。

抑<sup>そもそも</sup>法華經の如渡得船の船と申す事は、教主大覺世尊、巧智無辺の番匠<sup>ぎょうちむへんぼんしゆう</sup>として四味八教の材木を取り集め、正直捨權<sup>しょうじきしゃごん</sup>とけづりなして、邪正一如ときり合はせ、醍醐一実<sup>たいごいちじつ</sup>のくぎを丁<sup>ちよう</sup>とうって生死の大海へをうかべ、中道一実<sup>ちゆうどういちじつ</sup>のほばしらに界如三千の帆<sup>かいによ</sup>をあげて、諸法実相のおひてをえて、以信得入の一切衆生を取りのせて、釈迦如来はかじ<sup>しやく</sup>を取り、多宝如来はつな<sup>網手</sup>でを取り給へば、上行等の四菩薩は函蓋相応して、きりきりとこぎ給ふ所の船を如渡得船の船とは申すなり。是にのるべき者は日蓮が弟子檀那等なり。能く能く信じさせ給へ。

四条金吾殿<sup>げんざん</sup>に見参候はゞ能く能く語り給ひ候へ。委しくは又々申すべく候。恐々謹言。

四月二十八日

日蓮花押

椎地四郎殿え